

結 章 クルマに依存しない郊外住宅地にむけて

考察 住民と学生のワークショップから読み取れること

今年度は、これまでの1年目の有識者による意見交換を中心とした研究、2年目のアンケート調査を中心とした研究を踏まえ、実際に現地に入り、住民の方々の考えを直接に聞きながらワークショップ、リーフレットの配布という手法をとり入れ、地域の方々にクルマに依存しない郊外生活について考えていただく機会を作る手法の研究へと発展させた。

本研究によってとられた手法は、以下のようなものである。

鉄道駅からは徒歩圏内になく、公共交通はバスに限られている住宅地である外院地区を対象とした、ワークショップを行った。

学生が地域に感じた印象を以下にまとめると、

- (1) 住宅地の地域性のなさ
- (2) 道の単調さ、地域景観の単調さ
- (3) 人影の少なさ

の3点であった。

(1) の地域性のなさと対比して、興味を持ったのが周辺の集落環境である。集落のはずれにある神社、寺、住宅地の中に残る墓地は大変興味深いものであったが、住宅地がこれらの空間とまったく関係を持つことなく存在していた。これらの二つのエリアは、隣接していながら、結びつける道路は限られた数本で、そこに見えているのにアクセスするためには遠回りをしなければならない。おのずと人の交流もほとんど見られることはなかった。

(2) 道の単調さについては、まず、どの道も広すぎることで、どの道もクルマが優先であることが話題となった。人は、歩道がない道も端のほうを歩いている、どうして真ん中を歩けないのか、といった疑問が出された。店がまったくないことも学生にとっては不思議な印象であった。地図上に名あったはずのクリーニング店や喫茶店が閉店していた。調査対象とした地区の一部は建築協定により店舗が禁止されているものの、それ以外の地域でも、数少なかった店舗がさらにその数を減らしており、住宅地内の店舗は皆無といってよかった。

(3) 敷地の大きな戸建住宅が並ぶ町に、人の姿を見ることがほとんどなかった。歩いている人がほとんどいない。各住宅は、道路とレベル差があったり、塀が高く立てられているなど、外から人の気配を感じることもない。それは、先に指摘したように住宅地内にちょっと人が集まる場所や、ちょっとした買い物をする場所など「歩いていく場所がない」ことにも原因する。

第1回ワークショップに先立ち、参加者を募集するパンフレットを地区全域に配布した(資料1)。学生は以上の印象を持ちながら、居住者との第1回ワークショップに取り組ん

だ。パンフレットをみてワークショップに参加した居住者は皆無で、事前をお願いしていた地域活動のメンバーが参加してくださった。実際は、ブレンストーミングのような形になった。

参加してくださった居住者の方々は、高齢の男性が多く、「坂道が多く、高齢化し足腰が弱くなると、家から一步も出ることはできなくなる。そうなれば、駅上のマンションに引っ越すのだ」との考えも聞かされ、学生一同、クルマに依存する住宅地の、想像以上の現実と直面することとなった。

学生たちは、自分たちが住宅地を歩いてまとめた印象をまとめたリーフレットを作成した。それは、学生たちの印象をそのまま反映した、外院の住宅地は白地図となっている、マップとして形になった。

その結果を踏まえ、学生たちは3つの提案をつくった。

提案1 歩いて楽しい道をつくる

現在の道路網にメリハリをつけるため、迂回できる道路は閉鎖して歩行者専用道路とする提案と、住宅地の中央を横断しているバス道は、通過するクルマの速度を落とさせるように、これまで狭かった歩道を広げ車道を狭くする提案を行った。

提案2 神社と公園を一体化させた街の庭をつくる

住宅地と隣接する集落の間に位置する神社と池に目をつけ、これまで住宅地にはなかった自由な空間、「市場」を提供しながら、集落との交流も図ることのできる空間の提案を行った。

提案3 地域の核となる、集まって暮らす場をつくる

空き家になっている住宅を利用して、地域の人々が集まることのできる空間、一人暮らしの居住者を支えるソフト(自宅介護などの情報)、ハード(お風呂や食事を提供する空間)の提案を行った。地域の人々がその場を訪れることにより、街に人影が増えることが最も期待されることである。

これらの提案の発表会を行う旨を先のリーフレットに載せ、地区の全住戸に配布した。2度目の配布である。その結果、2回目の居住者ワークショップには、9人の居住者の方々がまったく自主的に参加してくださった。

1月13日、9人の居住者の方々に対し、先の3つの学生提案を発表した。いずれの提案も、一定の賛同は得られたものの、不可能なのではないかとの意見も根強く、また、競合する施設として、クルマで行く場所が提案されるなど、居住者の認識に徒歩圏というエリアがほとんど認識されていないことが浮き彫りとなった。

この意見交換を得て、さらにブラッシュアップされた提案を配布する予定である。

以上のような一連の試みの成果として、

- (1) 地域の人々は、クルマに依存している住宅地の生活に危機意識を持ちながら、共有して話し合える場を持ち合わせていない(声をかければ集まる)。
- (2) 地域に住んでいない学生からの提案し、意見を言う中から、自分たちの住む住宅地

のもつ問題点を改めて認識することに役立つ
といったことが明らかとなった。

最終パンフレット配布の成果は、現在のところ不明であるが、今後、よりわかりやすい提案、たとえば集まって暮らす場の模型や図面による提案、市場空間の図面による提案を行うことにより、自分たちの住宅地についてより現実的に考える場を提供することができると考えている。